

ピカソを超えていく

諸輪在任

青木

幸一

さん (77歳)

世界有数の芸術大国・フランス

で行われた美術公募展「サロン・ド
トーヌ2022」。フランスの展覧
会屈指の難関としても知られ、現
在まで100年にわたって開催さ
れているこの展覧会では、国際画
壇に新しい風を吹き込むような独
創性が求められます。

今回は「第19回サロン・ドトーヌ
2022」に入選された青木幸一
さん(以下「青木」表記)にお話を
伺いました。



—— 絵画に興味をもったきっかけ
は何ですか。

青木 中学生の時に、美術界隈で
有名な高校の美術科を目指す同
級生から七宝焼きの話聞いて
興味を持ち、「自分にも何かでき
ないかな?」と空想しました。
それをきっかけに色で描く世界
に深く惹かれ、気づけば美術大

学に進学していました。

—— 大学では芸術家になる道を選
ばれたのですか。

青木 大学で商業デザインを学び、
卒業後は広告代理店で勤務しま
した。当時は今までにない広告
が開化し始め、アメリカでは民
間のテレビ放送など、まだ日本
には普通でない斬新な世界があ
りました。新しいものが大好き
な私は、マスメディアの仕事に
興味を持ったのです。当時の新
しいことに夢中になる本能が今
の自分につながっています。

—— では、本格的に絵画制作に取
り組み始めたのはいつからですか。

青木 定年退職し、時間に余裕が
できてからです。さまざまな経
験をして、教えてもらったこと
に感謝しています。培った知識、
技術などが社会に役立てばと、
パソコンの中のキャンバスと
日々向かい合っています。

—— 今後の目標を教えてください。

青木 「ピカソを超えること」で
す。世界に認められる作品を描
くには、ピカソのように「新し
い価値や考え方」、哲学が必要で

す。例えば、かの有名な絵画「ゲ
ルニカ」は「戦争を視覚化したい」
という他者とは異なる思いがあ
りました。今までのもの、大衆
が好むものではなく、新しい価
値を表現している所からうかが
えます。私は、ピカソのように、
新しい価値を表現していきたい。
今はその一歩として、アメリカ
で行われる世界最大級の美術展
「アート・バーゼル・マイアミビー
チ」に出展したいと思っています。

—— 最後に、青木さんにとって
「アート」とは何ですか。

青木 「人間の価値は何に、どこ
に?」を考え表現したものです。
アート自体の意義は、吉本隆明
のとなえる「国家とは共同幻想
であり、芸術とは自己幻想であ
る。」いわば、それがアートの真
髓かな。

—— 技術の高さももちろんのこと、
今まで世になかった新しい発想を
表現することが求められる厳しい
世界。しかし、ピカソを超え、さ
らには時代を超えて後世に語り継
がれる偉人が東郷町から誕生する
かもしれません。青木さんの更な
るご活躍を祈っています!

夢を叶えるための“私のメソッド”

朝起きてすぐに作品制作をする

眠すぎて、半分夢の中にいたとしても、
すぐに制作に没入する。朝ご飯を作って、
洗濯して…といった日常生活のルー
ティーンよりも、もっと大切なのが「人
間の想像力を引き出す」ことです。

こうすることで、頭の中にある「常識」
にとらわれることなく、「人間の真相、
価値」を表現できたらベストですね。

